

ペテロ第一2章1-10節 「尊い、生ける石」

1A 御言葉の乳 1-3

2A 捨てられた石 4-8

1B 礎石に建てられた霊の家 4-6

2B つまずき、妨げの岩 7-8

3A 選ばれた、聖なる祭司 9-10

本文

ペテロの第一の手紙2章に入ります。ペテロは、1章の後半で、キリストの復活によって新しく生まれ、生ける希望を与えられたキリスト者が、再臨を待ちながら、聖い生活の中に歩むように召されていることを読みました。それは、金銀のような朽ちる物ではない、小羊のような尊い血によって、贖い出されているからです。そして2章において、ペテロは教会の建て上げの中身に入っていきます。キリスト者個々人が神ご自身に招かれていることがあり、同時に私たちが共同体として、一つの召しの中に招かれていることを見ていきます。

1A 御言葉の乳 1-3

1 ですから、あなたがたは、すべての悪意、すべてのごまかし、いろいろな偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、2 生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。

ペテロは前回、22節から、兄弟たちが純粋に、熱く愛し合いなさいという呼びかけをしていたところを読みました。それは真理に従うことによってであります。もちろん神の言葉が真理です。それに聞き従うことによって魂が清められ、それで熱く愛し合うことができます。そして、神のことばによって新しく生まれて、その言葉はとこしえに代わることがないという約束を読みました。

その続きであります。私たちが呼び出されているのは、「みことばによって成長する」ということです。私たちに実質的な、霊的な成長をもたらしてくれるのは、神の御言葉です。他に、何か良い話が、例えば恵みの分かち合いがあったり、救いの証しがあったりするかもしれません。もちろん、それらも徳を高めるのに役立ちます。けれども、霊的に成長させるのは神のことばなのです。イエス様が、種まきの喩えで、みことばを心にしっかり受け入れる人が、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶのだと言われましたね。

そこで、互いに愛することを阻むものがあります。それが、ここに列挙されている、あらゆる「悪意」であります。キリスト者が個々人で聖い生活をするということも、世から来る思い煩いや惑わし

との戦いの中で保っていくものでありますが、互いに集まって共に時間を過ごすからこそ、出て来る問題が、この悪い態度であります。相手に対する悪い思いを留まらせているのであれば、それがどんな理由があろうと、その時点で霊的成長が阻まれます。学校で例えるなら、小学校を卒業しなければいけないような時に、未だ九九の掛け算のところまで止まっているような状態です。そして、人はその悪意があることを隠す傾向にあります。それが、「ごまかし」です。自分の悪い思いを隠して、それで互いに付き合います。ですから、「偽善」があります。人に対して、自分はまともなクリスチャンであること、霊的であること、愛があるように見せることはできています。けれども、裏では全く異なることを考えています。そして、「ねたみ」ですね。妬みこそが、キリストを殺した悪意がありました。神に愛されている兄弟、選ばれている兄弟を妬むことは、彼を殺しているのと同じことです。そして、「悪口」があります。悪口、陰口は、兄弟愛を、教会を殺します。だから、これらの悪意をすべて、捨て去りなさいと命じています。

これらの捨て去ることをすると同時に、「純粋な、みことばの乳を慕い求め」ます。慕い求めについて、「生まれたばかりの乳飲み子のように」でなければいけない、とあります。これは、もらわなければ泣き止まないほどの強烈な求めです。申命記には、イスラエル人がマナを食べて荒野の生活をしていたことについて、「申命 8:3 人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる」とありました。日々の生活が、神がマナを与えられた言葉を食べるようにして受け入れて、待っている状態ですね。ある韓国人のクリスチャンが、「韓国語では、御言葉を読むと言わないで、御言葉を食べると言います。」と言っていました。学んで頭に入れるのではなく、霊的に食べていくのです。しかし、ここでは御言葉を食えるという以上の、もっと強い慕い求めです。お乳を飲むような感じで飲みます。貪りに近いほどの渴望です。

そして、それによって成長して、「救いを得るため」であるとあります。これは、終わりの日の救い、イエス様が戻ってきてくださる時の救いの完成のことです。1章5節に、「終わりのときに現れるように用意している救いをいただくのです。」とあります。したがって、私たちが終わりの日に至るまで、霊的に成長するという不断の努力がある、ということです。

2:3 あなたがたはすでに、主がいつくしみ深い方であることを味わっているのです。

そう、ここに全ての鍵があります。主が慈しみ深い方であること、良い方であることを知っているかどうか？であります。「主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。(詩篇 31:8)」主が慈しみ深い方であることを知っているからこそ、その御言葉は慕わしいもの、渴望するものとなっています。そして、ますますこの方を知りたいと願っているからです。

2A 捨てられた石 4-8

そして、御言葉を慕い求めるという霊的成長が土台となって、次に霊の家の建て上げの話に入

ります。

1B 礎石に建てられた霊の家 4-6

4 主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です。
5 あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。

ユダヤ人への使徒と言われるだけの、ユダヤ人に対してよく理解できるように、教会の建て上げを話しています。ユダヤ人が神の神殿を持っていて、そこに祭司が主に仕えていました。その建物の礎石が、霊的にはキリストご自身であり、そしてあなたがたはその石でもあり、また祭司でもある、ということです。

初めの命令、「主のもとに来なさい。」はとても大切です。祭司が神の聖所で、主の前に絶えず出て行くように、私たちも同じように、絶えず主の前に出ていきます。「詩篇 100:1-2 全地よ。主に向かって喜びの声をあげよ。喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。」そして、「ヤコブ 4:8 神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。」

そして、主がどのような方であるか、ペテロは明らかにしています。「主は、人には捨てられたが、神の目には、選ばれた、尊い、生ける石です。」であります。人には捨てられたが、神の目では尊い石であるということです。今、迫害を受けているガラテヤ地方にいるキリスト者たちに対して、ペテロが手紙を書いています。その時に彼ら自身がキリストに結ばれた者として、人々には退けられる、拒まれるけれども、その中で神が尊いとみなしておられる、選ばれているという恵みを受けている、ということをお話そうとしていきます。

キリストあるいはメシヤは、旧約聖書の中で「石」として呼ばれる箇所が非常に多いです。次の 6 節のイザヤの預言もそうですし、7 節の詩篇からの預言もメシヤを指し示しています。ダニエル書では、人手によらず切り出された石が、人の像に当たり、それが粉碎された後に、その石が大きな山となるという預言があります(2 章)。そしてもちろん、教会についてイエス様がペテロに、この岩の上にわたしの教会を建てる、と言われました。岩や石という存在は、イスラエルの地域にとってありふれたものです。石や岩だらけであります。その中で、岩というものがいつまでも続くもの、変わらないものという意識が強く残っています。地域が乾燥しているので、いつまでもそこに存在しているからです。モーセはこのように歌いました。「申命 32:4 主は岩。主のみわざは完全。まことに、主の道はみな正しい。主は真実の神で、偽りがなく、正しい方、直ぐな方である。」そして、敵が来た時に隠れることのできる場所、自分を守り、助け、救ってくださる方として岩という言葉を使っています。「詩篇 71:3 私の住まいの岩となり、強いとりでとなって、私を救ってください。あなたこそ私の巖、私のとりでです。」そして、6 節や 7 節は、建物の礎石として、自分の全てがより頼んで

いるもの、自分が立っているところという意味合いがあるでしょう。ですから、キリストを岩や石と呼んでいるのです。

そしてこの方が、初めに「選ばれた」石です。主なる神がキリストについてこう言われました。「イザヤ 42:1 見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。」主は、ご自分の救いを与えるのに、誰かを選んで全てを救うことを行われます。主はご自分の働きをする時に、誰かを選び、その者を立てて、そしてその者を通して働かれます。国においても、どの働きにおいても、私たちは選びますね。国会の代議士を選び、学校であれば学級委員長を選びます。ですから、しばしば「神は分かるけれども、なぜイエスなのか？」という問いを受けます。答えは、「神が選ばれた方だからだ。」ということです。神は選んだ王や預言者、また大祭司に油を注げと命じられましたが、「油注がれた者」というのが、メシヤの意味です。

ゆえに、「尊い」ですね。この方によって、この御名のみによってのみ、初めて救いがあるからです。ペテロはサンヘドリンにおいて、宗教指導者たちの前で大胆に宣言しました。「使徒 4:12 この方以外には、だれによっても救いはありません。世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」ペテロは「尊い」という言葉をこの手紙で多く使っています。貴重な金銀よりも貴いということ、子羊のような血であるとして 1 章 19 節で言っています。それから、信仰の試練も、精錬されて朽ちていく金よりもなおのこと尊いと 1 章 7 節で話していました。そして「生ける石」であられます、この方に命があり、人を甦らせる命があります。ペテロはこの言葉も好きで、1 章 3 節では「生ける望み」と話しました。

しかし、イエス様は「人には捨てられた」方でありました。なぜ、このように神には選ばれ、尊い、生ける石であるのに、人には捨てられるのでしょうか？イエス様ご自身が、バプテスマのヨハネに、「だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。(マタイ 11:6)」と言われましたね。預言者であるヨハネでさえ、はたしてイエス様が来るべき方なのか、疑いが生じてしまっていたのです。彼はメシヤが力を持ってこられ、不従順な者に裁きをことごとく下される方だと思っており、ゆえに悔い改めなさいと説き、それで彼自身がヘロデ・アンティパスの悪行を指摘したために、牢に入っていました。しかし、イエス様は足なえが立ち上がったたり、盲人が見えるようになる、らい病人が清められる、これらのことがメシヤが来られた徴として聖書に書いてある、だからつまずくな、と励まされたのです。

そして、つまずくだけでなく、ここでは捨て去るということを人がキリストに対して行ないます。事実、ユダヤ人指導者がそれをイエス様に対して行ない、ローマ総督ピラトに引き渡しました。神に選ばれた方を受け入れるということは、全霊をかけて、へりくだって、この方を迎え入れなければならないことです。かつて、モーセとアロンに対する神の選びを、コラが受け入れられず、「主は全ての者を聖なる者にしたではないか。なぜ、あなたは人の上に立つのか。」と言って、反乱を起こ

しました。全ての人に平等に分け与えなければいけないのだという人間主義、また自分が、ないがしろにされているという利己主義が、その妬みの背後にありました。

そしてこのようにキリストがおられ、そして私たちがこの方に結ばれているのですから、5 節があります、もう一度読みます。「あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。」

かつてユダヤ人たちは、神殿の中に入ってそこで神を礼拝しました。けれども、ペテロもパウロも、使徒たちは、「私たち生きた人間たち、キリストを信じ聖霊が与えられた私たちが、霊の建物になる。」という啓示を受けていました。「エペソ 2:20-22 あなたがたは使徒と預言者という土台の上に建てられており、キリスト・イエスご自身がその礎石です。この方にあつて、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、このキリストにあつて、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」私たちはまさに、この建て上げの渦中にある、その現場におり、神の建て上げの真っ最中にあるものですね。石なるキリストにつながることで、自らも石となり、キリストの体として機能するのです。

それから、大事な真理が、「聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。」であります。聖なる祭司であります。聖い生活をしなさいという命令が 1 章 16 節にありました。神の聖さにあずかって、罪や汚れから離れている生活です。そして、祭司としていけにえを捧げます。祭司というのは、基本的に仲介の働きです。主の前に出ること。人々に代わって出ることです。それから、主の前に出た後で、神の恵みを人々に分かち合う存在です。これが、私たちの務めであり、奉仕であります。私たちの第一の務めは、主の前に出ることです。そして主の栄光を見ることです。この方の前で仕えることです。このことによって、御霊に満たされ、キリストにより近い者となります。

そして次に、その恵みの栄光をもって、他の人々に対して仕えます。ですから、私たちが祭司の務めというものを知って、それで初めて神の御心を行なうことができます。祭司は、キリストと同じ、神に選ばれ、召しを受けた者です。そして、忠実であることが求められます。したがって、私たちがキリストに選ばれ、呼ばれて、そして命令を受けてそれを行ないます。「主に命じられたことを行う」ということだけに集中していれば、よいのです。自分はいくまでも器であり、僕であり、主がご自分のことを、自分を通して行われます。宗教改革によって、祭司は信仰を持つ者たち全員であるという、万人祭司が説かれましたが、それはイエス・キリストだけの仲介によって神に直接つながるという意味だけではなく、それ以上に、全ての人々が奉仕者であり、与えられた御霊の賜物があり、互いに仕えて、互いに主の恵みと祝福を受けるということでもあります。だから、一人だけでイエスに近づけるから、一人だけで礼拝するというのは大いなる誤りです。互いに司祭になっている、互いに霊的に助けると言ったら、分かり易いでしょうか？ですから、私たちが熱く、兄弟として愛し合うとい

う意味がますます重要になりますね。

そして、「イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい」とありますが、これはローマ 12 章 1 節のパウロの勧めと似ています。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」パウロは、私たちの体そのものが生けるいけにえと言っているのに対して、ペテロは、自分自身ではない何か他のものを霊のいけにえとしています。聖書には、感謝のいけにえ、賛美のいけにえという表現が使われています。けれども、重要なのはそのような細かい違いではなく、旧約時代の祭司がいけにえを捧げたというのと同じように、私たちは自分自身を、また自分の持っているものを主に捧げるということが、神の願われていることだということです。礼拝は何かをもらいに行くところではなく、神にいけにえを捧げに行くところです。

2:6 なぜなら、聖書にこうあるからです。「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。」

ペテロが依拠したこの引用は、イザヤ書 28 章 16 節からのものです。イザヤ書には、アッシリヤに取り囲まれるエルサレムの姿が出て来ます。北イスラエルは、アッシリヤに滅ぼされてしまいました。ユダは、エジプトとの同盟があるから安全だという思惑がありました。しかし、主はそれを「死との契約を結び、よみと同盟を結んでいる。」と言われました。アッシリヤの軍隊の洪水は、時運たちの所にまで押し寄せ、溢れながれ、自分たちを踏み越えていくとイザヤは預言しています。その中で、実は自分たちの町エルサレムにこそ、救いがあると神は言われました。ご自身がエルサレム、シオンに住まわれています。他国に頼るのは頼りない、わたしこそが救いであり、選ばれた石、尊い礎石を置くと言われたのです。そして、メシヤがその石であり、イエスがそのメシヤであるということです。イザヤ書には、「これは、試みを経た石」とあります。イエス様は、いろいろな方面から挑戦を受けられました。それでも、この方の真価は試された後に、現れました。ですから、この方に信頼しても、失望させられることはありません。偽物であれば、後で恥をかきます。エマオの途上に行く二人の弟子は、そのような面持ちでした。偉大な預言者でイスラエルを贖うと思っていたのに、と言っていました。もちろん、その期待は裏切られませんでした。このように、頼ることのできる方なのです。私たちがいかに、心を一つにして、この方の命令のみに従っていくのか？が問われています。

2B つまずき、妨げの岩

7 したがって、より頼んでいるあなたがたには尊いものですが、より頼んでいない人々にとっては、「家を建てる者たちが捨てた石、それが礎の石となった。」のであって、8 「つまずきの石、妨げの岩。」なのです。彼らがつまずくのは、みことばに従わないからですが、またそうなるように定めら

れていたのです。

7 節に引用されている詩篇 118 篇 22 節にある言葉は、主ご自身も、また使徒たちも数多く引用しました、有名なメシヤ預言です。背景にこんな話があります。ソロモンの神殿を建てている時、石の切り出しと、その石を削る作業は神殿の現場で行われるのではなく、別の場所で行ないます。したがって神殿では、ただ石を置いていく作業だけで、音が聞こえませんでした。それで、どこの場所にどの石を当てはまるか、番号か印を付けたのでしょう、石を現場に運び出す時に付けました。そして礎石があります。それを現場にまで運んだら、どこに行くのか分からなかった。それがお粗末に見えたので、草むらに捨てて置いたというのです。それで、ついに礎石を入れる時が来ました。この大事な石があるからこそ、建物全体が成り立っているのですが、それが見つかりません。捜してみたら、実は捨てられていた石が礎石だった、というのです。そこから、ユダヤ人の宗教指導者がイスラエルの家を霊的に建てているはずなのに、肝心の礎石であるメシヤご自身を捨ててしまった、という逆説です。

この逆説の中に私たちも生かされています。より頼む者たちにとっては、こんな尊い方であるのですが、そうでない人々によっては、「あなたの、そのイエスへの信仰が邪魔なんだよ。」と、邪魔になる石、妨げ、躓きの石になるのです。それは、切支丹への迫害の歴史にも如実に表れていました。迫害者の急先鋒は、転び切支丹であったと言われていました。つまり、キリストにつまずいた人々であり、しかし激しい拷問を受けてもそれでも信仰を棄てずに殉教した切支丹にとっては、かけがいのない方、尊い方なのです。

そして 8 節の、「つまずきの石、妨げの岩。」という言葉はイザヤ書 8 章 14 節にあります。ここでは、イザヤがちょうど、インマヌエル預言を行ったところです。アハズ王に対して、主を試しなさい、イスラエルとシリヤがあなたがたを襲うことはない、と説いたのにも関わらず、彼はそれを信ぜず、アッシリヤに金を払って、攻めてもらうようにしました。すると、アッシリヤはシリヤとイスラエルを倒したのですが、それだけでは終わらず、ユダにも虐げを始めたのです。目の前にある脅威に対して、その問題に対して、「イエス様に拠り頼みましょう」という言葉には、ある人は馬鹿にし、またある人は怒り出すでしょう。「そんなたわごとは、休み休みに言え。」と叱られるかもしれません。そして、アハズを始め、ユダの人々がそのような思いになっていたのです。主は、より頼む者たちには救いとなりますが、そうでない者たちには、つまずき、妨げとなります。

そして大事なのは、「彼らがつまずくのは、みことばに従わないからですが、またそうなるように定められていたのです。」という言葉です。そうなるように定められている、ということです。つまり、みことばに従わないのに、つまずかないで済むということはない、ということです。言い換えれば、怒りや苛立ち、無視や侮蔑、表面的には受け入れても実は信じていなかった、だから離れた、など、そういった現実を神は既に知っておられる、ということです。初めから、つまずく人々がいること

を織り込み済みで、主はキリストをこの世に遣わされたのです。ですから、4章で迫害があっても、「何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく(12節)」とあります。私たちに、大きな圧迫となって、証しを立てているのに不信仰の波をもろに受けることになります。

3A 選ばれた、聖なる祭司 9-10

9 しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。

ここの「しかし」の言葉が大事です。躓く人が多くいるなかで、自分たちは躓きの多いこの時代の中でも、大きな召命を神から受けているのだ、という励ましであります。イエス様が聖なる方であり、選ばれた方であり、王であり大祭司であります。私たちはキリストに結ばれた者として、それに連なる召命を受けています。これらの言葉は全て、出エジプト記やイザヤ書などに、イスラエルの民に対して主が語られた召命であります。ペテロは、この召命の中にあなたがたが肉によっては異邦人だけれども、イエス・キリストによって接ぎ木されたのだと言っているだと思われま

まず、その該当するイスラエルに対する主の言葉を読みます。まず「選ばれた種族」については、神のイスラエルに対する愛の言葉があります。「申命記 10:15 主は、ただあなたの先祖たちを恋い慕って、彼らを愛された。そのため彼らの後の子孫、あなたがたを、すべての国々の民のうちから選ばれた。今日あるとおりである。」そして、「王である祭司、聖なる国民」また「神の所有とされた民」については、出エジプト記 19 章ですが、イスラエル民が紅海を渡り、荒野の旅に出て、シナイ山の麓にまで来ました。そして、主がモーセを通してこのように語られました。「出エジプト 19:5-6 今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中であって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。あなたがたはわたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。これが、イスラエル人にあなたの語るべきことばである。」主は、彼らをご自分の翼に載せたと言われます。そして、彼らを全世界の中で、国々の民の間で、宝の民とすると言われます。これが神の所有とされた民ということです。彼らこそが神の大切な相続、財産にするということです。なぜなら、彼らは、「祭司の王国、聖なる国民となる」からです。

まず、「選ばれた種族」であります。これは、「選ばれた国民」と言ったらよいでしょう。先ほど読みましたように、イスラエルの民は彼らが優れているから選ばれたのではありません。愛されたから、ただ憐れみを受けて選ばれたのです。選びについて、私たちはしばしば誤った見方をします。優れているから選ばれているのだ、と妬んだり、ひがんだりするのです。いいえ、神の選びとしてヤコブを思い出してください、彼は生まれる前から「わたしはヤコブを愛した。(マラキ 1:2)」と言われ、それで選ばれました。彼の行ないは、お世辞にも優れていると言えませんが、それなのに神の選

びの確かさが彼の生涯を通して表れました。私たちが全て、神の召し、その聖い生活を歩み、迫害するような人々の中で善を行うことのできる全ての源泉と力は、神の一方的な憐れみに基づく、選びの召命にあります。

そして、「王である祭司」あるいは、「祭司の王国」です。先ほど話したように、祭司とは神と人とを仲介する人です。祭司の務めを果たすことで、人々は神の偉大さ、神の祝福、神の恵みにあずかることができます。その祭司たちの集団がイスラエルであって、そして今は、教会が祭司の王国として召されているのです。キリストを王とし、キリストを偉大な大祭司としている者たちが、今度は自分たちが祭司の務めを果たすことによって、人々に神の国の恩恵にあずかることができるようにします。キリストの再臨によって、キリストを王として、共同で統治する者たちとなっていくますが、今でも霊的には、自分たちが祭司の務めを全うすることによって、霊的な神の国が人々に広がる、ということでもあります。

例えば、私たちは全ての人たちの対する祈りがあります。「1テモテ 2:1-4 そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。」

私は、天皇陛下の生前退位を公表された時の言葉を読みましたが、そこに「祈る」という言葉が二度出て来ました。「私はこれまで天皇の務めとして、何よりもまず国民の安寧と幸せを祈ることを大切に考えて来ました」とあります。つまり、国民統合の象徴として、人々の心を思い、寄り添うために祈られるということです。そして政治の中には入らず、全ての国民に遍くその祈りが行き届くように、尽力してこられた、ということです。この発言の背後にはもちろん、神道の祭司としての働きがあります。神道の祭司的な働きですら、このような執り成しの思いを持っておられるのですから、ましてや、私たちキリスト者こそが、王なる祭司として、祭司の王国として、自分で制限を持たせることなく、遍く全て人に対して、また王や高い地位にある人たちのために執り成しをします。そうすることが、神の御心にかない、全ての人が神の真理を知るようになる通りよき管となるのです。

そして、「聖なる国民」であります。あらゆる国々がある中で、その中で神の属する者として、別たれている存在です。神の命令のみに従う者たちです。この世の国々がどのようなことを言っても、マスコミの風潮がどうであっても、神の命令のみに縛られており、その中で動く者たちということでもあります。例えば、間もなく私は、東アジア青年キリスト者大会に向かいます。日中韓のキリスト者が集まり、礼拝し、祈るのですが、日中韓にある軋轢があります。しかし、私たちは国々を超えないといけません。一つの聖なる国民であり、キリストにあって一つとなっており、そのことを

確認しないとイケないのです。教会がこの世のしていることと同じ事をして、ましてやキリストの名によって、この世のしていることを補強したり、正当化したりすることはおかしいのです。右でもなく、左でもない、全く異なる存在としてキリスト者はこの地上に置かれています。

そして、「神の所有とされた民」ですが、神は私たちをご自身の財産としておられます。ご自分の御子の血を対価として支払うほどに、私たちの存在は尊いもの、財産になり、私たちは神の所有の者となっています。

そしてその目的が書かれていますね、「それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。」であります。やみの中というのは、罪や不義、不法の中です。そこから、神の驚くべき光の中に招き入れられました。イエス様がパウロを召し出す時に、こう言われました。「使徒 26:18 それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあつて御国を受け継がせるためである。」つまり、私たちが聖なる国民、神の所有の民となったのは、自分たちだけで生きるためではなく、むしろこれを宣べ伝えるため、大使として、使節として動くためなのだということでもあります。

10 あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です。

これはホセア書 1 章に使われている言葉です。イスラエルが神を拒み、遠く捕囚の民となるところで、神はそのようにして彼らを引き離したけれども、再び神の民として引き戻す、その憐れみを言い表している言葉であります。ユダヤ人にとっては、イエス様を知ったことによってそのことを実感したことでしょう。イエスを信じたことで、真実に神の民となることができました。そして異邦人は、初めから神から遠く離れていましたが、イエス・キリストによって憐れみを受け、神に近づけられました。神の憐れみを受けた者たちとして、主から召されている務めを果たしていく、ということです。

今回は、具体的に異邦人の世界の中で、また不信者によって迫害されているなかで、神から与えられた務めを、聖なる国民として、王なる祭司として、また驚くべき光の中に招き入れられた証しをどのように立てるのか、その適用を読んでいきます。立派に働き、罵られてもそのようにして、制度には従い、全ての人々を敬う、というように続きます。